

好奇心は猫を殺すか？

—好奇心の認知的役割を巡って—

鵜殿 憩 (北海学園大学)

好奇心 (curiosity) の本性および認識における役割を探求することは、現代の徳認識論における重要な課題の一つである。好奇心は、一般的に、新しい知識を獲得し、活用することへの動機として理解される。そして、この特徴は開かれた心 (open-mindedness) という認知的徳とも関連づけられる。開かれた心、知的誠実さ、知的勇気、忍耐力などは、しばしば認知的徳の典型とみなされる。しかし、一部の認識論者は、標準的な認知的徳の特徴づけの焦点が、獲得主義的 (acquisitionalist) であり、認知的な抑制 (epistemic restraint) の重要性を軽視しているという批判を展開する。例えば、Neil Manson (2012) は、標準的な認識論的徳の特徴づけにおいて、知識の獲得に関連する性質ばかりが認知的徳の特性として強調されており、知識を求めないこと、発見しないことが徳であるという点がほとんど考慮されていない、と指摘する。

好奇心旺盛な人は、しばしば「無邪気な」や「冒険好きな」と形容される。好奇心旺盛であることは、知識の獲得の場面では効果的に働くが、自身の能力を超えた事柄について知ろうとしたり、探求の過程において、自己や他者を危険に晒したりすることがある。そして、無謀さとう側面に焦点が当てられるとき、好奇心は認知的悪徳と見なされる。

本発表は、好奇心の認識論上の役割を探求する過程で、18世紀の哲学者デイヴィッド・ヒュームが与えた哲学的分析を手掛かりにする。そして、好奇心が認知的な抑制の観点からも、有徳な性格特性に関係していることを説明する。具体的には、認知的な抑制において一般的に重要視される要素 (注意深さや、賢明さ、臆病さ等) は、好奇心と対立するものではなく、むしろ好奇心を構成する要素に他ならないことを明らかにする。

好奇心へのヒュームの言及は、『人間本性論』第二巻第三部第九節において初めて登場する。ヒュームは好奇心を、見知らぬ対象に遭遇した際の人間の情緒的な反応とみなしている。彼の説明によれば、見知らぬ対象の出現は、それが詳しく調査される以前の状態においては、人間にとって不快であり、その不快感が好奇心を喚起する。好奇心は、未知の対象への臆病さと感受性を持った生物としての人間が持つ情念であり、未知の対象の出現によって触発される反応である。しかし、それは個体を無謀な冒険へと駆り立てる盲目的な心の働きであると単純に片付けることはできない。人間が未知の対象に興味を持ち、理解しようとするのは、その対象の潜在的な危険を予測し、それを避けるように対策を図っているからである、という洞察をヒュームのテキストから抽出できる。

ヒュームは、人間が原始の状態において持つプリミティブな種類の好奇心について説明しているが、より文明的な状態において、人間が、意図的に好奇心を誘発されるような状況に自らを置くことを認めている。人間は不安や不快を取り除くためだけでなく、知識や理解の獲得を通じて好奇心を満足させることで得られる快樂の予感によって探究活動を開始する。また、人間は、探究の対象となる事柄について深い理解に達するのに時間を要することが予感されると、よりいっそう好奇心を持つ傾向がある。

本発表の後半では、より文明化された状況における好奇心の発動についてのヒュームの説明に焦点を当てながら、解釈上の議論を進める。人間が未知の対象が出現するという状況において持つ反動的な種類の好奇心とは別に、ヒュームは、『人間本性論』第二巻第三部第十節において、人間をより能動的な認識的活動へと導く動機としての好奇心について言及しているが、ここでのヒュームの説明においても、好奇心と認知的抑制は対立しない。ヒュームは好奇心 (彼はこれを「真理愛」と言い換える) が、自分や社会にとっての有用な真理が何であるのか考慮に入れたものであることを説明するが、この点を踏まえれば、人間が自らや社会を危険にさらす探求を思いとどまるべきである、という規範意識は、好奇心の健全な機能の観点から説明できる。

さらに、ヒュームが、好奇心 (真理愛) を、誘惑や衝動に直面した際に人間が極端な行動に走るのを抑制する働きとして説明していることにも目を向けたい。例えば、彼は『人間知性研究』において、真理愛を基盤とする懐疑的哲学が、人間の情念を鎮静化させる働きを持つことに言及している。また、『道徳・政治・文学論集』においては、賢人が、虚栄心ではなく、好奇心によって動機づけられることを、より洗練された趣味 (taste) を持つ人が、より低い快樂に耽溺する傾向が少ないことと類比的に論じている。

ヒュームは、趣味の洗練を、より低級な快樂への辟易を示す、高度な感受性を育む文明化の過程として説明する。彼が好奇心を、文化の洗練に基づく文明的な徳とみなしている点は注目に値する。このように好奇心を、衝動的ではなく、抑制的な心の働きとして理解することの理論上のメリットについては、掘り下げて説明する予定である。

好奇心を認知的な徳とみなす立場をヒュームに帰属させる本発表の試みは、二つの問題に直面する。第一に、好奇心という情念または感情 (それは通常、瞬間的で断続的であるとみなされる) は、いかにして「徳」(「心の持続的な原理に依存しなければならない」とヒュームが言及する) になり得るのか。第二に、健全な哲学に従事し、正しく推論する者は、迷信的な宗教の思弁的なドグマへと人間を導く「性急な好奇心」を持たない、という『人間知性研究』におけるヒュームの言及は、好奇心を、真理への探究へと人間を導く認知的徳として彼が捉えていると解釈と整合するのか。本発表では、これらの問題についても検討し、好奇心を、ポジティブな認知的役割を持った認知的徳とみなす洗練された理論的な説明をテキストから抽出したい。具体的には、ヒュームが真理愛としての好奇心を「激しい情念」と対比される「穏やかな情念」として捉え、好奇心を束の間の感情ではなく、認知的探究へと静かなに誘う動機として捉えている点を明らかにする。また、ヒュームが好奇心の徳を、「足りなさすぎ」と「行きすぎ」という二つの悪徳の中間に置くことによって特徴づけているという、アリストテレス的な路線を採用し得ることを説明する。